

桜蔭俳話会 七月句会(第三〇七回)

平成二十四年七月二十一日(日)

藤棚地区センター

4点①父と子の揃ひのシャツや梅雨明くる

友子

2点①卯の花の未完の刺繍友の逝く

ヤエ子

①山気籠め蛭袋のひとつづつ

貞勝

繕はぬ歳時記親し送り梅雨

秀一

かるがると家を持ち上ぐ梅雨出水

明美

病み明けの友と乾杯ソーダ水

友子

短夜や転々として明けを待つ

溪水

屈託無く生きる技あり富貴欄

ヤエ子

此の度も同じ顔寄せ泥鱈鍋

秀一

かなぶんやガラスに残る児の手形

友子

和太鼓が呼び込む夏のセールかな

明美

1点①白寿まで唱へし反戦麦の秋

友子

①伎芸天の指もて線香花火かな

貞勝

①外つ国の人の後ゆく盆踊り

ツル子

熱帯夜かすかにありし皮膚呼吸

明美

露座仏の光背となる雲の峰

貞勝

この夏にヒッグス粒子見つかりぬ

真三

椅子引いて長電話聞く団扇かな

秀一

テーブルに夏鳩の立ちポテトやる

真三

夕立の過ぎてまると静まりぬ

ツル子

あめんぼや理不尽な死のまたひとつ

守

鎌倉がかぶさつて来る夏木立

貞勝

炎天や脱原発を叫ぶ群

友子

七夕や織女は何処星満天

溪水

広がりてビルのかなたに雲の峰

真三

地すれすれ倒して疾走バイク夏

ヤエ子

ミニトマト正しき列で熟れはじむ

ツル子

初茄子や約束に似て次の花

貞勝

丁寧に掃く階段や梅雨明くる

ヤエ子

※実梅落つ音のやはらか夜の雨

守

朝のひまモネの画集白日傘

ツル子

梅雨明けを待ちつつテレビ友として

溪水

日矢遊ぶ野の果て風の青芒

守

乳色のあふれる出で湯火蛾遊ぶ
土用芽に負けぬ元気よひ孫たち
まむかひに射しくる西日帰宅の途
万緑や保育器に死すパンダの子
生きざまは嫌ひな言葉釣忍
汀てふ大き砂場や裸の子
乗りつぎて地上に出でし雷のあと
体熱を逃がす素足や節電す
草刈の香も投函す赤ポスト
石垣の片陰に立つこちよし
梅雨明や齒止めかからぬクールビズ
剪定の終りてさつきさばさばと

ヤエ子
溪水
真三
明美
秀一
守
ツル子
明美
秀一
真三
守
溪水

(不在投句 野上貞勝、瀬戸溪水、古野明美)